
クルトゥース 紅の王

高田 玄武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クルトゥース 紅の王

【Zコード】

N1166E

【作者名】

高田 玄武

【あらすじ】

少女を襲つた、たつた一瞬の出来事。彼女の人生は、その瞬間、幕を下ろした。

鈍い音がこだまする。太い木の枝を、無理矢理へし折ったような

「 ぐわやああ……！」

「・・・ふん。まつたぐ、折角の晩餐を下らなこものにして欲しくないな。」

足元に転がるように倒れこんだ男の頭を、ブーツで踏みしめながら彼は気だるそうに言い放つ。右の手の甲に、どす黒い十字のアザを持つ彼。

「おや? 右腕はもうおしまいかね? なんなら左も」

と言いかけて、彼は男の左手に握られた、重く光る、黒い塊に気付く。

「 ほほう。良いモノを持っているじゃないか。そうだ、いいことを思い付いた。」

口の端を上げて、にやりとした彼は、男が手にした鉄の塊を、その腕じと、十字のアザのある右手で掴み、隣で惚けたように立ちすくむ、まだ幼い少女のほうに向けさせる。

「 やめろおつ……やめてくれえつ……！」

哀願するように、悲痛に滲んだ顔を歪める男。それを、とも嬉しそ

うに見つめる彼。

「 おと れん? 」

少し気を持ち直したのか、少女は父親と呼んだ男を、依然としてぽんやりと見つめる。まだ意識がぼやけているのか、何が起こっているのか状況が飲み込めない少女。

「・・・フフツ。いいね、その顔。どうかね? 実の娘を、たつた今、その凶器で撃ち抜こうとする感覚は。絶望かい? それとも、快樂になるのかね? 少なくとも、今私はとても楽しいよ。よかつた、今宵の晩餐のメインディッシュが残つていて。」

男は体を捻り、必死に動かそうとするが、押さえ付けられた左手も、あらぬ方向にへし曲がった右腕も、切断されて血の水溜まりを作つた両足も、男の思つよにはならない。

「 か 逃げ 逃げろおおお! 」

力を振り絞つて、娘に最期の言葉 ただ逃げろとだけ叫ぶ、男。

「 おとつわ 」

父と娘の、今生の別れを、更に引き裂くかのよつ。

「 そろそろ、いいかね? もう私は空腹に耐えられそうにない。じゃあ、これで。」

ゆづくじと、引金に掛けられた指の、神経が動く。銃声はさほゞ響

かない。全てが一瞬の出来事。

「 がつ はあ 」

倒れ込む娘を、絶望の表情で追う男。

「 」

倒れた少女はピクリとも動かない。ほんの数秒か、少女の回りに、紅い鮮血が、絨毯のように広がる。

「 ああ。最高だよ。こうでなくてはね。・・・もういいよ、お腹一杯だ。君、割りと楽しかった。それじゃ。」

男が、悲痛の叫び声を上げるより先に、彼の右の腕は、男の頭蓋を吹き飛ばしていた。

「 ああ。もうこんな時間か。」

彼は呟くと、何事もなかつたかのよつとしきびすを返す。

始まりだった。それは、少女の人生の、終わりであり、始まりだったのだ。

夢だ。

多分あたしは夢を見ていた。余りに鮮明に焼き付いた、悪夢。

「 つ！」

目を覚ます。朝は大体こうだ。もう慣れた。この悪夢も、あれからずっと、消えることはない。

10年前 。突然あたしの家族を襲つた、悪夢。悲劇？いや、あんなのは悲劇とは呼ばない。ただの惨劇だ。それも、三流の。まずは母親が殺された。あの化け物は、母親を一瞬で胴体と下半身に分けた。一瞬の話だ。次に、12歳になる兄。そして二つ下の妹。父は最期まで戦つた。だが、あの化け物の手で、頭を吹き飛ばされて死亡。ヤツは楽しんでいた。その化け物じみた力で、人を殺すことを。

右手の甲に、ドス黒い十字のアザを持つ男。

唯一生き残つたあたしも、瀕死の重症だつた。左の脇腹を、拳銃で撃ち抜かれた。父の銃だつた。あの男は、よりもよつて父の手を使い、あたしを撃ち抜かせたのだ。あの時の父の顔は、忘れられない。

あたしはその後、生死の淵をさまよつた。よくは覚えていないが、救出に来た隊員が言うには、即死でもおかしくないほどの量の出血だつたらしい。左脇腹損傷。肋の骨は完全にイツてたらしいし、心臓を紙一重で避けていたことも奇跡に近かつた。

生き残つたあたしは、このCBCの一員となつた。・・・どちらにしても、家族を皆殺しにされ、行く宛てもないあたしは、施設に入れるか、路頭に迷うかどちらかしかなかつた。

CBCは、合衆国・日本・英國、そしてその他の国際連盟加入国をスポンサーに、極秘裏に設立した特殊調査室だ。公に出ることはな

いが、世界中で起る極々特殊な事件に対処するために、合衆国が提案で設立されたとされる。・・・一部じゃ、東南アジア辺りの宗教家や思想家のお偉いさん方を敬遠するための処置だとかも囁かれているが、あたしは政治には興味がない。・・・唯一興味があるとすれば、あたしの家族、そして人生を奪つたあの化け物 ヤツの息の根を止めることだけだ。

「 あら、起きたの？ずいぶんうなされてたわね。」

「・・・どうもふかふかのベッドにや慣れてなくてね。 より、今何時？時差ボケ、キツくてさ。」

「1005。今日は非番でしょ？」

「 んげつ！もうそんな時間！？やべー、いつの長官に挨拶しに行かなきゃなんねーんだよ。」

「ああ、ボス？だつたら 」

突然、ドアが開く。

「 おうつーお前が米国から派遣されてきたってえ娘かーー！」

・・・なんだ？」の妙に暑苦しいおつさん。

「 あ、ボス。ダメですよ、女の子の部屋に入る時はノックしないと。」

ボスうーーのおつさんか？

「わっははは！ わりいわりい、ついな。いやはや、しかし……。」

「うん？ なんだ、このおっさん。あたしのことをジロジロと……。」

「米国からの特殊調査官つーからどんなイカツイやつかと思つたが……うん、まあ発育具合は微妙だが器量はまずまずつてところだな！ わっはっは！ ……」

「……」

「シネええ！ ……！」

と、あたしの鉄拳が炸裂する前に。

「ボス。それ、セクハラですよ」

「……あがつ……がが……つ……」

彼女の手に握られたスタンガンが炸裂していった。……てかれ、熊用じやねえか？ 最大出力110万ボルト……。

「……あがつ……ががががつ！」

……恐ろしい。綺麗な顔して、鬼だな、この姉ちゃん……。

「 じゃ、改めて自己紹介するわね。私は、東雲環^{しののめ たまき}階級は中佐よ。そしてこの人が 」

「 あんどう たもつ
安藤 保大佐だ！一応、CBC日本支部の部長をやつてる。」

「 シュリー・モーガン少佐、本日11100をもつて、CBC日本支部に配属されました！」

「 おう、俺あ堅苦しいのは苦手だー。この俺の部下になるからいや、覚えとけよ。」

「 ・・・じゃあおおっさんでいいな。とにかく、なんなんだ？この緩い環境は。CBCの名が泣くぞ。特に施設。」

「 ・・・いきなり失礼になりやがったな。まあ、それでいいんだが！がつはつは！！」

「 ・・・どーにも緩いおっさんだな。イギリスのバーナー大佐が見たらなんていうか・・・。」

「 ・・・気持ちは分かるわ、シュリー。この施設、元々が防衛庁のものだからね。隊員は総勢1524名。それでも多分、国内じゃ最大級の権力を持つてるはずよ。何せ、米国直属の機構だしね。」

・・・確かに、CBC特務員には破格の権利が与えられる。軍事と

いう攻撃的手段を持ち得ない日本といつ国において、武力を持つ唯一の機関が防衛庁、つまり自衛隊だ。しかし、どーせ秘密裏に設営された機関なんだ。ここまで貧相な施設である必要もなかつたんじゃないかな?」

「・・・まあいいよ。どうせ平和ボケした日本じゃ、階級すらあってならんつて聞いてるからね。ところで、武器庫はどこだ?せめて弾薬の確認くらいはしたい。あたしが持つてきたウーホポンはすでに運ばれてんだろ?」

「格納庫なら地下よ。あ、でも・・・。」

「・・・ん?なんだ?」

「あー、お前さんの持つてきた重火器なら、そのまま米国へ送り返しちたぞ。」

「 なつ 」

「なんだとおつ!-?」

「あたしの223WMRはつ!-?M1919はああつ!-?..-?」

「・・・あんのなあ、嬢ちゃん。ここは日本だ。いくら自衛隊とは言え、あんなどでかいマグナムやら機関銃やら持ち歩かれちゃたらんのよ。」

「ちよつとまめてつー?じゃあ何か!-?あたしに丸腰で任務を遂行しろつづーのかつ!-?」

「ちやんと血の監禁呪術しがねる。せれ。」

「おれがおれんがねりつたのさ・・・。

「……9月31日！？」こんなオモチャでバケモノヒミツがつあつ
つづんだよ！？」

ミネベア9mm拳銃。・・・確かにメイドインジャパンは高性能だ
つついでよお～・・・。

んー。ちよいと嬢ちゃん、地下の演習場で試し打ちしてみつか。

試し打ちつて

「おお、お二おおおおー?」

困惑するあたしを無視して、ベースに向かうおっさん。・・・おいおい、どーなつちまうんだあ！？あたしの愛銃は！？あたしはタマキを見たが、片手を挙げて苦笑いするのみ。・・・ええい！とにかく、ついてくしかねーのかよ！－くつそ－つ－！

「 距離は150フィート。マガジンには九発。初弾が一発充填されてる。あの的、狙つてみな。」

あたしはおつやんの後を追い、地下の演習場に来ていた。

「・・・なあ、なんで今更・・・。」

「 いいから。よーへ狙えよー?狙うほど真ん中のみだ。」

「 おつ!」

こつなつたら 意地でも全弾命中させて吠え面かかせてやるー!

ズドーーーーンッ!

まずは一発目。トリガーを引くと、小気味良い銃声と共に、弾丸は見事、的に命中。ど真ん中から右に数センチずれたが、バランスサ一の未調整つて部分も含めると、まずまずの出来だ。

続いて、二発目。今度はど真ん中に命中!うしつ!

あたしはおつやんを横目で見ると、ふふんと鼻を鳴らしてやつた。おつやんは的を見据えたままピクリともしない。

そして三発目、四発目と続いて命中。それぞれ若干左にずれたが、ほんの数ミリつてところだらう。そのまま、十発目まで全て、真ん中の円内に収まつた。

「 おつよーー?」

あたしは自信たっぷりにおっさんに言い放つ。

「 ふむ。まあまあってとにかく。」

はあー？初めて使う拳銃で、射程距離きりきりの上、しかも弾道が逸れやすい9mmだぞ！？まあまあって

「 貸してみ。」

「 あ、おい 」

おっさんはあたしから拳銃を取り上げると、マガジンを外し、懐から新しいマガジンを充填する。そして、スライドを引くとそのまま片手で

ズドンッズドンッズドン

ワンハンド連射っ！？しかも、反動をものともせず あ
つという間に、九発全てを打ち終わつた。

「 どうだ？」

的に向かつて放たれた弾薬は、一発目のみが赤い円のど真ん中に穴を空けた。 他に、的に空いた穴はない。 穴が、ない！

「 ・・・。」

・・・マジかよ・・・。つまり、おっさんは、九発全てを、寸分の

狂いもなく、ど真ん中に命中させたってことだ。・・・に、人間技
じゃ、ねえ・・・。

「 いべらり 9 m m でもな。同じ傷に何発もぶち込みや、マグナ
ム以上の破壊力になる。 嬢ちゃん、武器つてのはな。使い手
次第なんだ。武器の性能に頼つてちやあ、いざつて時にや使い物に
ならなくなる。使いよつてよつちや、小石だつて立派な武器になん
だぜ? 」

「・・・・・」

おおさんば、あたしの田を見て、ただ、そりゃげる。

「 ちなみに、俺の部下たちは一人残らずこの程度の芸当はできる。
どつだ? 根を上げて國に帰えるか? 」

・・・ 9 m m 拳銃の有効射程はせいぜい 165 フィート、つまり 5
0 メートルが限界つてとこだ。もちろん、距離が長くなればなるほど、精密な射撃は困難になる。ぶつちやけ、そこのいらの兵隊レベル
なら的に当てるのがやつとつて距離だ。・・・それを、易々と、し
かもワンハンドの連射で・・・！

「 ちくしょう! 」の演習場、しばらく借りていいかつ! ?
いつもなつたら、あたしだつて意地でも 」

「 ああ、いいぞー。あ、予備の弾丸はそここのケースにあるからな。
頑張れよ。 」

ちくしょうーー絶対やれるよつになつてみせらかつーーこんな芸
当出来ないで、あのバケモンぶつ殺せねえからな！

その後、非番なのを忘れて、晩飯までずっと射撃訓練を続けたあたしであった・・・。

「・・・ぐすつ。ボス、ちょっとやりすぎたんじゃありません?」

「む? 東雲、見てたんか。」

ひたすらに射撃訓練を続けるショリーを見つめる安藤保と東雲環。
「あんな射撃が出来るの、ボス以外に居ませんよ、この隊には。・・・
・よほど気に入ったんですね、あの娘のこと。」

「・・・まあ、色々あつてな。あいつは、ちと理由有りなんよ。」

「ワケアリ? そういうえば、この時期に人事移動だなんて随分
急な話だとは思いましたけど・・・。」

「昔、な。俺の人生を変えた男が居た。その男の 形見なんだよ、あいつは。」

「・・・へえ。ボスのそんな話、初めて聞きましたよ。 涙い

人だったんでしょうね、その人つて。」

「・・・ああ、凄い男だった。俺なんか足元にも及ばねえくらいな。
」

「ボスがそこまで!-?」

「・・・おい、お前俺をなんだと思ってんだ?」

「……んと、憑きモノ以上のバケモノ?」

「……あのねえ……。」

「あはは、冗談ですってば（あながち嘘でもないケド……。）」

「……その男が、10年前、何者かに惨殺された。当時向かつた隊員の話では、そりゃあものすげえ有り様だつたらしい。五人家族でな、妻は胴体まつぶたつ。長男と次女は首から上を引き千切られて……当の本人は、両足を引き千切られた上に、頭部切断で即死。……検死の結果じや、両足は死ぬ前に断絶されてたらしい。そんなとき救助した長女も左脇腹を撃たれ重傷。……調べたら、父親が握つてた拳銃の弾紋と一致。……つまり犯人は、父親に自ら長女を撃たせて、殺そうとしたわけさ。その重傷の長女が、ショリー・モーガン。つまりあいつってわけよ。」

「……酷いですね……。でも、ガイシャの傷跡が、引き千切られた……つてことはもしかして……。」

「ああ。そんな人間離れした殺し方、まつとうな人間に出来るわきやねえ。憑きモノさ。それも、かなり頭のイカれた、な。」

「……ショリーは、そのことを?」

「多分知ってる。だが、あいつは怪我が回復してからもしばらくシヨックで言葉を失つててな。CBCに自ら志願するまで、いつ自書してもおかしくない状態だつたもんで、事情聴取も免除されたんだ。」

「

「・・・つまり、あの娘がCBCに入ったのは、家族の仇を取るため・・・」

「恐らくな。・・・7歳で訓練所に入り、3年後にはCBC特殊支援部隊に所属。更に3年後に前線部隊に配属。そつから僅か4年で少佐階級まで異例の最年少スピード出世。・・・まあ、持つて産まれた才能もあんただうが、そこまでがむしゃらな理由つてのは、大概予想がつく。・・・あいつは、ほつといたら死に急ぐタイプだな。」

「・・・だから、あの娘をじつちに呼んだんでしょう?」

「・・・まあ、な。おかげで、イギリスのバーナーの野郎にはじつひどく叱られたんだが。ビーもあいつとは昔からウマが合わねえ。」

「ふふつ、でも、よく見つかりましたね?」

「事件のことは知つてたが、その娘が隊に所属してるとは思わなかつたもんでよ。異例の新人が居るつてんで名前を聞いたら、シェリー・モーガンつてんでまさかとは思つたんだが。」

「・・・そうだったんですね?」

「あ。この話、あいつにやナニシヨな? こんな話聞いたら日にや、「あたしは独りでも大丈夫だ!」なんてキレて米国に戻りかねんからな。」

「さて、どうしましょーかねー。」

「おこねこ。頼むぜ、環^ル。」

「・・・うふふ、冗談ですよ、冗談。・・・ボスの貴重な過去話も聞けましたしね。それに免じて、内緒にしといたげますつ」

「はあ。ひやひやせんなんよ、まったく。」

「あははは」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1166e/>

クルトゥース 紅の王

2010年10月15日18時00分発行